

# 希望のポケット童話

**cage**



「あたしの犬をしりませんか？」

女の子が行き交う人に問いかけます。人々は気ぜわしく、女の子の問いに耳を貸しません。日は傾き、空気も冷たくなってきました。

女の子は白いスニーカーを履いています。白いパーカーを着ています。紺のキュロットスカートを履いています。髪はおかっぱです。

一人のお姉さんが足を止めました。

「あたしの犬をしりませんか？」

「お嬢ちゃんの犬？ さあ、知らないけれど、私はもっとかわいい犬を見つけたわ」

お姉さんが女の子の髪にさわると、女の子は小さな白い犬になってしまいました。

「きゅん！」

女の子だった白い犬は、犬の言葉で「あたしの犬はどこですか！」と叫びました。

お姉さんはにっこり笑いながら言います。

「お嬢ちゃん、自分でできることは自分でしなくっちゃね。あなたには立派な鼻があるでしょう？」

女の子だった白い犬は鼻をぴくぴくと動かし、何かに気付いて駆けて行きました。行き交う人々はこの出来事にまったく気付きません。白い犬の後姿にお姉さんは呼びかけました。

「出会えたらいいわね」

女の子だった白い犬は夕暮れの街を駆け抜け、女の子の犬を見つけました。匂いで白い犬が女の子だとわかった犬は、白い犬にじゃれつき、鼻先をぺろりと舐めました。白い犬はたちまち元の女の子の姿を取り戻し、女の子の犬を抱きしめました。

「帰ろうか」

女の子が言うと、犬は元気にほえて応えました。来た道を女の子と犬は走って帰ります。途中であのお姉さんを追いこしましたが、女の子は気付きませんでした。女の子の犬がちらりとお姉さんを見て小さくほえ、それがお姉さんには「ありがとう」と聞こえたのでした。

## 太陽の花

---

広い原っぱにたんぽぽが一輪咲いていました。

子猫がやってきて話しかけます。

「君は小さいね、まだ子供の僕よりも小さいや」

たんぽぽはえへん、と応えます。

「僕はライオンって言う名前もあるんだ。ライオンは君より大きいんだよ」

子猫はびっくりして言いました。

「ライオンだって？ 僕だって大きくなったらライオンになるんだ。ライオンになって見に来たときにまだ小さかったら笑うからね」

子猫とたんぽぽは朗らかに笑いあいました。

原っぱにライオンがやってきました。

「君は僕の名前も持っているけれど、小さく揺れるだけだねえ」

たんぽぽはふふん、と応えます。

「僕の仲間は太陽の花なんだ。僕は大きくなったらひまわりになるんだぞ」

ライオンはびっくりして言いました。

「太陽だって？ 僕は太陽がないと寒くて凍えてしまう。君の成長を祈らないといけないな」

ライオンとたんぽぽは朗らかに笑いあいました。

たんぽぽは花を終え、くたりと横たわりました。少しだけ寝るんです。

目が覚めたらきっと大きく成長していると思いながら。

……目を覚ますとたんぽぽは綿毛に包まれていました。

風がふわっと綿毛を空に舞い上げます。

たんぽぽは言います。

「僕は太陽に近づいて太陽になるんだよ」

子猫が見ていました。

ライオンが見ていました。

## 桜とすずめ

---

桜のおじいさんが、ぽつんと一人、丘の上にはいました。

すずめの子供たちがピピピチュンチュンとやってきました。

「おじいさん、遠くを見つめてどうしたの？」

桜のおじいさんは答えます。

「寒い春じゃな」

すずめの子供たちはピピピチュンチュンと騒ぎます。

「寒いけれど、ちゃんと春は来るよ！」

「寒いならぼくたちが暖めるよ！」

すずめの子供たちがいっせいに木の枝に擦り寄ります。

「ははは、暖かい、くすぐったい」

桜のおじいさんは笑顔になりました。

しばらく寒い日が続きましたが、やっと日差しそのものが暖かくなってきました。

桜のおじいさんは枝のつぼみを開きます。

薄桃色の花びらがやわらかく開いて、すずめの子供たちがまた騒ぎます。

「おじいさんおじいさん、すごいね、きれいだね！」

桜のおじいさんは答えます。

「どうだい、いい春じゃないか」

すずめの子供たちはびっくりしました。

「遠くからでも春が来たってわかるね！」

「春ってこんなにいいものなんだね！」

桜のおじいさんはすずめの子供たちに言いました。

「けれど、これほどきれいに咲けたのはきみ達がいたからだよ。ありがとう」

桜のおじいさんは春の光に包まれて、すずめの子供たちに囲まれて、幸せそうに笑いました。

## 裏山を冒険～ハトの恩返し～

---

ケイコちゃんとユウタくんとアキナちゃんとマコトくんが裏山を冒険。てくてく歩いて裏山を冒険。

ケイコちゃんが言います。

「わあ、大きな木」

ユウタくんが言います。

「でっかい虫だ」

アキナちゃんが言います。

「ほら穴があるよ」

マコトくんが言います。

「何かいる！！！」

マコトくんの大声に、ケイコちゃんとユウタくんとアキナちゃんが寄ってきました。  
真っ白いハトでした。ハトはバサバサと羽を動かしますが、うまく動けないようでした。

ケイコちゃんが言います。

「ケガしてるのかな？」

ユウタくんが言います。

「木から落ちたのかな？」

アキナちゃんが言います。

「消毒液ならもってるけど」

マコトくんが言います。

「たしかめてくる！」

マコトくんはハトに近寄り、そっと触りました。

「ケガはしてないみたい！」

羽にひもがからまっていたので、マコトくんはそれを丁寧に取りました。

ハトはゆっくり羽を確認して、バサリと飛び立ちました。四人の頭の上をぐるぐると回り、  
「こっちにおいでよ」とでも言うように山の奥へ。

ケイコちゃんとユウタくんとアキナちゃんとマコトくんは追いかけます。しばらくいくと広場に出ました。

「あ！」

ケイコちゃんと言いました。

「あ！」

ユウタくんも言いました。

「あ！」

アキナちゃんも言いました。

「すごい！」

マコトくんが叫びました。

そこにはキイチゴがたくさんあって、赤と緑が鮮やかでした。

ハトはヌッヌーと満足そうに鳴き、また四人の頭の上を回って、飛び去っていきました。

「ここを秘密基地にしようよ」

ケイコちゃんが言いました。

「いいね」

ユウタくんが言いました。

「いっぱい遊べるね」

アキナちゃんが言いました。

「ここはでも、山みんなのものだよ」

マコトくんが言いました。

マコトくんの言うことに、ケイコちゃんもユウタくんもアキナちゃんもうなずいて、今日の冒険を完了することにしました。

キイチゴをいくつか食べて、山を下ります。

ケイコちゃんが言います。

「楽しかったね」

ユウタくんが言います。

「うん、とっても」

アキナちゃんが言います。

「また来たいね」

マコトくんが言います。

「山みんなとも仲良くなりたいな」

またいつか、裏山を冒険することを約束して、ケイコちゃんとユウタくんとアキナちゃんとマコトくんはニコニコしながら帰っていきました。

山の木の上では、白いハトがヌッヌーと鳴いていました。

## サニーマン

---

サニーマンは太陽電池で動くロボットです。すごい技術を結集して作られていて、太陽の光さえあれば、人間と同じように歩いたり者をつかんだり考えたり喋ることだってできます。

光り輝く太陽のもと、サニーマンは歩きます。昼寝をしているウサギに出会いました。

「ヤア、うさぎサン。ドウシテ眠ッテイルンダイ？」

ウサギは目を覚まして答えます。

「いい天気だからさ。怖いオオカミもないから、ゆっくりしていたいんだ」

サニーマンは目をピカピカ光らせながら言いました。

「ソウカ、私ハイイ天気ダカラ、イッパイ歩キタイヨ」

ウサギが言いました。

「いっぱい歩いたら休息もしっかり取りなよ」

サニーマンは力強くうなずき、歩き続けます。

光り輝く太陽のもと、サニーマンは進みます。踊っているリスたちに出会いました。

「ヤア、リスサンタチ。楽シソウダネ」

リスたちは踊りながら答えます。

「いい天気だもの。じっとしてるのはもったいないからね」

サニーマンはまた目をピカピカ光らせながら言いました。

「ソウカ、私ハ遠クニ行ッテミタイカラ歩クヨ」

リスたちが言いました。

「遠くに行っても、帰る場所はあるからね」

サニーマンは力強くうなずき、進み続けます。

傾いた夕日のもと、サニーマンはゆっくり足を動かします。高い山につきました。

「フウ」

サニーマンは立ち止まりました。太陽が沈む準備をはじめ、だんだん暗くなってきました。山の上からすそ野を見下ろします。

「イロンナモノガ見エルナア」

サニーマンは座り込みました。どんどん暗くなってきます。

「サア、私は今カラ眠ルコトニシヨウ」

太陽の光が届かなくなり、サニーマンのエネルギーは切れそうです。

「目ガ覚メタラ、楽シイだんすヲ踊ルコトニシヨウ」

そう言ってしまうと、サニーマンは固まって動かなくなりました。

朝になれば太陽がのぼります。太陽がのぼったらサニーマンはまた動きはじめます。さあ、ど

んなダンスを踊るんでしょうか。太陽はかならずのぼるから、お楽しみに。



## 食べちゃえ

---

おいしいもの食べちゃえ。  
あまーいケーキ。ジューシーハンバーグ。  
ぱくぱくもぐもぐ。  
ごっくん。  
おいしいものでお腹いっぱい。  
お腹の中が幸せいっぱい。

嫌いなもの食べちゃえ。  
にがーいピーマン。骨いっぱいお魚。  
ぱくぱくもぐもぐ。  
ごっくん。  
嫌いなものでもお腹いっぱい。  
目の前にはきれいなお皿。

楽しいこと食べちゃえ。  
ランラン遊園地。びっくり映画館。  
ぱくぱくもぐもぐ。  
ごっくん。  
楽しいことでお腹いっぱい。  
今夜の夢はウキウキいっぱい。

怖いこと食べちゃえ。  
ドロドロおばけ。ほえる犬。  
ぱくぱくもぐもぐ。  
ごっくん。  
怖いことは飲み込んだよ。  
ほら、もう怖くない。

## かいじゅうやってきた

---

どすんどすん。

大きな足音を立ててかいじゅうが歩きます。

かいじゅうには怖いものなんてありません。

でも、かいじゅうはひとりぼっち。

みんな、かいじゅうの大きな体を怖がって近寄らないのです。

どすんどすん。

かいじゅうは山へ行きます。

昔からの友だち、竜神に会うために。

どすんどすん。

どすんどすん。

かいじゅうは悪いことを何ひとつしません。

歩くかいじゅうの後ろすがたを人々は見送ります。

山を登って、竜神のいる池につきました。

「よく来たね」

竜神はにっこり笑ってお茶を出しました。

お茶を飲みながらかいじゅうは言います。

「みんなから怖がられないようになりたいなあ」

竜神がこたえます。

「怖がるやつらは放っておけ。大丈夫、君のことをちゃんとわかってるやつもちゃんという」

お茶を飲み、お菓子を食べ、楽しい時間をすごしたかいじゅうは、来た道をかえっていきます

。

どすんどすん。

どすんどすん。

とおり道に小さな花だんがあったので、かいじゅうはしんちょうによけて歩きました。

小さな女の子がかいじゅうの後ろすがたに呼びかけます。

「花だん、ふまないでくれてありがとう！」

かいじゅうは女の子のにっこり笑いかけます。

「春になったらお花、いっぱい咲くから！ 見にきて！」

女の子の言葉に、かいじゅうはむねの中があったかくなったのでした。

折ってかさねてのばして、また折って。  
千人の娘さんがパイきじを作ります。  
サクサクのパイきじを作るには手間がかかります。

折ってかさねてのばして、また折って。  
バターをはさんだきじをうすくうすくかさねることでパイきじはサクサクに。  
1が2に、2が4に、4が16に、もっともっと。

千人の娘さんがつくるパイきじには、かくし味も折りこまれています。  
それは、ゆめで。  
それは、きぼうで。  
それは、よろこびで。  
それは、あいじょうで。

折ってかさねてのばして、また折って。  
たくさんたくさんかさなって、千枚のおち葉のように折りかさなって。  
ゆめも、きぼうも、よろこびも、あいじょうも、千人の娘さんたちによって折りかさなって。

サクサクのすばらしいパイきじが焼きあがったら、あまいあまいクリームをはさみます。  
いま、ここにミルフィユがひとつ。  
じょうずにたべるのはむずかしいけれど、いただきます。  
サクッサクッ。  
千人の娘さんの心がつまったミルフィユ。

## てるてるぼうず

---

天気予報で「明日は雨です」って言ってたの。

明日は雨、降って欲しくないなあって、ぼくはてるてるぼうずを作ることにしたんだ。

おかあさんが「はい」って、箱入りのティッシュとししゅう用の糸をくれたんだ。

マジックペンはぼくがもってるから、それでてるてるぼうずを作るんだ。

ティッシュを一枚とって、くしゃくしゃって丸めて。

もう一枚ティッシュをとって、かぶせて、ししゅう糸でキュウウって首を作った。

ししゅう糸は青色で、ぼくは「青空になればいいな」と思ったんだ。

ぼくの分とおかあさんの分、おとうさん、おばあちゃんの分と四つ作ったよ。

今から顔をかくよ！

ぼくの顔は、目が二つで、鼻がちっちゃくて、口は笑ってるの。

おかあさんの顔は、目が二つで、まゆげがとんがってて、口はでも笑ってるの。

おとうさんの顔は、まゆげが太くて、メガネで、口は笑ってるの。

おばあちゃんの顔は、メガネで、しわがいっぱいあって、口はちゃんと笑ってるの。

まどぎわに吊るすよ。ぼくたち家族のてるてるぼうず。

なんだか、楽しい話をしてそうだね。

ねえ、おかあさん、ぼくたちも楽しい話、しようよ。

明日晴れたらいいね。

晴れたらいいね。

ねえ、明日晴れたらさ、てるてるぼうずたちも連れて行こうよ。

## 緑のかんむり

---

手を合わせてね、指先をぱっと開くと、ほら、双葉。  
小さな手で、ぱっ。  
大きな手で、ぱっ。  
すべすべの手で、ぱっ。  
ごつごつの手で、ぱっ。  
みんながぱっと指先を開いて、ほら。ここには双葉がいっぱい。

手を合わせてね、指先をぱっと開くと、ほら、お花。  
小さな手で、ぱっ。  
大きな手で、ぱっ。  
しわしわの手で、ぱっ。  
ぷくぷくの手で、ぱっ。  
みんながぱっと指先を開いて、ほら。ここにはお花がいっぱい。

手をぱちんと叩こう。  
手を何度もぱちぱち叩こう。  
小さな手で。  
大きな手で。  
すべすべの手で。  
ごつごつの手で。  
しわしわの手で。  
ぷくぷくの手で。  
みんな、みんなの両手で。

拍手！  
春が来たんだよ。  
双葉が芽を出して、お花が咲いたんだよ。

手を合わせてね、指先をぱっと開くと、ほら、かんむり。  
小さな手で、ぱっ。  
大きな手で、ぱっ。  
しわしわの手で、ぱっ。  
ぷくぷくの手で、ぱっ。  
みんながぱっと指先を開いて、ほら。みんな、みんなにかんむり。  
春のかんむり。緑とお花のかんむり。

## 希望のポケット童話

初出 : マイクロスコピック ( <http://sleepdog.blog53.fc2.com/> ) 内  
sleepdog氏主催、希望の超短編&希望のポケット童話

c a g e : we must Control our AGgressive Emotions.  
<http://maruta.be/cage>

Copyright (C) 2011 c a g e All Rights Reserved.  
powered by ブクログのパブー (株式会社paperboy&co.)